慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リアリズムの国際政治学
Sub Title	
Author	小此木, 政夫(Okonogi, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.10 (2009. 10) ,p.129- 130
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	神谷不二先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20091028-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リアリズムの国際政治学

神谷不二先生が大阪市立大学を離れ、慶應義塾大学法学部で教鞭をとったのは、昭和四十五年四月のことであった。その当時、神谷先生はすでに『朝鮮戦争—米中対立の原形』や『現代国際政治の視角』を刊行して、日本で最も脚光を浴びる国際政治学者の一人であった。他方、私は修士課程第二学年の学生であり、石川忠雄教授の指導下で朝鮮研究に着手したばかりであった。

神谷先生の来塾はまったく予期せざることであったが、当然のように、私は石川研究会から神谷研究会に移籍させられた。神谷先生を法学部に招聘したのは石川教授だったからである。石川教授はそれが私のためだと考えたようである。また、神谷先生が単身で大阪から赴任したのだから、慶應での研究と教育を補佐する大学院生が必要だと考えたかもしれない。私の立場は多数の先輩を抱える石川研究会の末席から神谷研究会の最先任に急変することになった。

しかし、神谷先生の下で国際政治研究の手ほどきを受けたことは、若い学徒にとって、たいへんに幸運なことであった。なぜならば、当時は深く考えなかったが、朝鮮半島研究は国内政治研究だけで完結する性質のものでなかったからである。言い換えれば、神谷教授との出会いは、私に国際政治と国内政治のリンケージという新しい研究テーマを与えてくれたのである。後年のフルブライト留学も、先生に励まされてのことであった。

また、働き盛りの神谷教授は、当時、大学で教鞭をとるだけでなく、日本国際問題研究所、平和安全保障研究所、内閣外交政策懇談会、防衛庁防衛政策懇談会、日米欧委員会の活動やさまざまな国際会議に積極的に参加し、新聞や雑誌にも頻繁に登場した。米ソ関係、日米関係、ベトナム戦争、朝鮮半島問題、沖縄返還などを題材に、イデオロギーや理想主義に慣れた論壇でリアリズムの重要性を訴えたのである。そのような新しいタイプの学者の姿を身近で拝見することによって、私は自分の知見を広げることができたのである。

いま思えば、神谷流の国際政治学の支柱になっていたのは、外交史学でも国際政治理論でもなかったように思う。神谷流は人間性に関する深い洞察を基礎にしていた。

先生は冗長な表現を嫌って、「寸鉄人を刺す」ことを好んだ。最新の理論よりも中国の古典を引用したし、「国際政治学は大人の学問だ」「日本には……史はあっても、……論がない」と言うのが口癖であった。また、ご自分を「長編作家」ではなく、「短編作家」と心得ていた。

リアリズムの国際政治学は確かに大人の学問である。そのことを教える論客が少なくなるなかで、先生は東西冷戦や日米関係の「語り部」を自称して、八十二歳になっても旺盛に執筆活動を続けた。まさに「鉄人」と言ってよい。何の前触れもなく心不全に倒れたが、その直前まで机に向かっていたのだから、神谷先生らしい大往生であった。

心から恩師のご冥福を祈る。

法学部教授　小此木　政夫

政軍関係

神谷不二先生には平成二一年二月二〇日未明に急逝された。享年八二であった。翌週以降の予定も入っており、その日も平生と変わらぬ様子で、寝につくまで執筆をされていた由である。心不全での突然の逝去であった。昭和四五年に石川忠雄先生の招聘によって大阪市立大学から本塾大学法学部に転じられたが、私が先生の謦咳に接したのは昭和四八年からである。以来三六年にわたって薫陶を受けることになった。厳しく愉快な学部ゼミでの時間は得難い経験だった。その学恩は計り知れない。

若い頃、先生の著作でもっとも影響を受けたものは、「トルーマンとマッカーサー—朝鮮戦争指導の一断面」（一九六四年）および「政軍関係に関する一考察—シヴィリアン・コントロールについて」（一九六三年）である。顧みれば、神谷先生が先鞭をつけられた、政策と戦略の分析、ならびにそれらが遂行されるプロセスでの政軍関係をめぐるテーマに、同門の一人として、説いて尽